# 第1神風特攻隊　敷島隊の軍神

市川 国雄画

会報 特攻
平成7年8月
第24号

〒105 東京都港区虎ノ門
3−6−8　第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話　03(3432)1090

編集人　田中賢一
発行人　木村元正

一飛曹　中野　盤雄

大尉　関　行男

飛長　永峰　肇

一飛曹　谷　暢夫

**正式に編成した航空特攻の第一陣**

頽勢を挽回するにはこれ以外の方法はないという一航艦大西長官の信念のもと、選ばれた第一神風特攻隊の第一陣として、敷島隊の五機は、19年11月25日マバラッカトを発進し、敵空母に突入した（五人の階級は出撃時のもの）

敷島隊隊長関行男慰霊之碑（主碑）及びほか四軍神の碑
（爆弾型の碑）　**所在地**　愛媛県西条市大町　楢木神社境内

上飛　大黒　繁男

# 慶良間海峡
# 海と空の戦い

皆本　義博
陸軍㋥中隊長

## 兵要地誌

慶良間諸島は、那覇の西約三十粁隔てた古成層の十数個の島からなり、すべて山地を形成し飛行場適地は皆無で、諸所に断崖があり上陸適地に乏しい。

しかし、この島に囲まれた長さ十一粁、幅約二～四粁、水深四十乃至七十米の海峡は恰好の泊地で、台風のとき沖縄本島から船舶が避難するところでもあった。したがってここを米軍では、当初水上機基地及び補給船の泊地と考えていた。

## 沖縄本島に対する米軍の初空襲

私ども陸軍海上挺進戦隊は、敵の沖縄本島上陸時にその背面から輸送船団に対し水上特攻攻撃をかけ、上陸部隊および装備品を覆滅し、その行動を阻止する目的で三個戦隊が昭和19年9月末相前後して展開した。

10月10日早朝、突如として敵艦載機の攻撃をうけた。この攻撃は予想はされたが、第三十二軍全般としての防衛態勢も完成されてなく、とくに私どもは到着直後かつ対空兵器も皆無に近く、その惨禍は目に余るものがあった。この攻撃は早朝から夕刻近くまで続き、記録によれば延九百機で本島及び周辺の飛行場・港湾・艦船及び兵站施設のすべてに及び、慶良間諸島に対しても約六十機の来襲があった。日没頃本島を望見したとき、天に沖する幾筋もの黒煙で異常な緊張を引き起し、また航空の絶対的威力をまざまざと痛感した。

## 航空攻撃と連繋する海上特攻

硫黄島の戦闘経過から見て、早晩敵の沖縄進攻が予想される頃の3月10日から、軍司令部において陸海軍海上（中）特攻作戦部隊の合同会議が開かれた。軍司令部側から提示された航空攻撃は、奄美大島・喜界島・宮古・石垣等三百～四百粁の近地点からのものと、南九州・上海・温州・台北等六百五十～八百粁の遠地点からのものとがあり、約七千機をもって陸海軍とも総力をあげ求心的に攻撃をかけるものであり、その効果はこれ迄にない絶大なものとの説明で、関係者一同極めて意を強くしかつ決意を新たにした。

## 敵艦船に対する航空攻撃

敵は、沖縄本島上陸に先だち、3月23日正午頃、延約三百機をもって慶良間所在部隊に対し航空攻撃を開始した。

爆装した特攻艇をもって、闇夜奇襲によって攻撃することを唯一の任務とする我等は、隠忍しつつひたすらその機会を待っていた。

第九師団の沖縄からの転用に伴い、基地大隊を外された戦隊は、圧倒的な経空攻撃に対応の手段もなく、白日のもと乱舞する敵機の攻撃になすがままの態であった。こえて3月25日、敵は巡洋艦・駆逐艦・砲艦等十五隻をもって島に砲撃を開始した。

軍は、本島所在陸海同種部隊の秘匿のため、敵主上陸前の過早の運用をさけるべく、艇の自沈を命じた。ここで我々は特攻作戦を終了、劣等装備のまま島嶼守備に移行し、3月27日約一ケ連隊をもってする敵の上陸を許し、その後乏しい戦力ながらかろうじて持ちこたえつつ応戦に終始した。

4月1日、標高約二百米の島の山頂から本島の様子を眺めた。油を流したごとく凪いだ本島西方洋上を、南と北から整斉と航行する大型船団と夥しい護衛の艦艇を望見した。程なく上陸正面に対し砲撃を開始し、やがて上陸が開始された。上空を乱舞する敵艦載機もこれと呼応しているものと判断されたが、時折り船団上空に火焔と黒煙が見えた。おそらく近地点の基地から発進した特攻攻撃であろうと想い、我が同期生が紅顔に背を決してやっていると考え、胸の熱くなるのを感じ、手を合せて成功を祈った。

慶良間海峡には、戦闘開始の頃には数隻の艦艇が遊弋し哨戒に当っているようであったが、本島西方洋上には上陸船団を中心にし、内側に小艦艇、外側に大型艦をもってピケットラインを張り、日本の航空機及び舟艇等の攻撃を警戒していた。

目次

慶良間海峡海と空の戦……2
殉国沖縄学徒顕彰五十年祭……3
記憶に残る万朶隊のこと……4
特攻隊の思出……5
青航一期岡部三郎君……7
追憶　久住宏君……8
特攻殉国者慰霊大祭……9
解説・特別攻撃隊……10
海軍機体当り……11
幹候9期の調査……12
アジア共生の祭典……14
昭和殉難者……17
義烈空挺隊碑前祭……23

主上陸完了ののちは、慶良間海峡には数多くの艦艇・貨物船が集結投錨し、その間に内火艇等が忙しく連絡にあたっていた。

4月5・6日頃と記憶するが、薄暮の空に聞き馴れた米軍艦載機の音と異なりやや軽快な爆音が聞こえ、海峡内の艦艇が一斉に両国の花火のごとき弾幕の対空砲火をもって応じ、そのうち火焔が見え海中に突入するもの又轟音とともに爆発を起す艦艇及び貨物船が見掛けられた。

とくに、4月下旬頃になると、エアハンマーのごとき音響が夕刻聞こえて来たので、海峡に接近して眺めると応急修理用の浮ドックで、その周辺に艦体を損傷したものが数多く繋留されていた。米海軍公刊戦史に「損傷艦艇で慶良間列島の錨地は身動きが出来なかった」と記録されている。我が第三戦隊の陣中日誌にも「4月9日曇、夜間特攻機飛来す。海峡の艦船煙幕を展開、対空射撃激し」と附記されている。これ等の特攻攻撃は、その後も続けられ多くの戦果も認められたが、また折角敵上空に到着しつつ惜しくも洋上で散華された方も少なくなかった。

## 終りに

我が隊は完全に席捲され、僅かに島の頂部の一角に陣地を固守したが、弾薬・薬品および糧食も殆んど尽き、連日の戦闘で戦死者また破傷風や栄養失調に基づく戦病死者が多数出た。兵にとって唯一の士気昂揚は、払暁又は薄暮に来攻する友軍特攻機のみであった。負傷で足の萎えた兵が、木によじ登り、三角巾を打ち振りながら涙を流して万才万才と叫び、地上の敵の銃撃にひるまなかったのを、一再ならず鮮明に覚えている。

米陸軍公刊戦史に「沖縄において、戦闘に参加出来ない多数の病人が発生したが、その大部分は神経症または戦闘における過労であった。精神障害の比率は、沖縄の場合は他の太平洋地域におけるより格段に高かった」と航空特攻の最高潮に達していた沖縄でのべている。

私は自衛隊奉職中、海上自衛隊の軍用機で鹿屋基地から那覇小禄基地に飛んだ。とくにパイロットにたのんで陸海特攻機の多くが選んだ高度を所望した。かつての戦闘海面が近づくにつれ、滂沱として涙を禁じ得ず、果し得なかった任務への悔悟を含めて機上でご冥福を祈った。

（海上挺進第三戦隊第三中隊長）

# 殉国沖縄学徒顕彰五拾年祭

## ―若い人達によって行はれている―

6月23日は沖縄慰霊の日である。

靖国神社におけるこのお祭りは、殉国沖縄学徒顕彰会の手で昭和34年から毎年この日に行はれている。

この会の代表者は国士館大学教授の金城和彦氏であるが、祭文を奏上するのは毎年大学生で、運営はすべて若い人によって行はれている。我々が多く出会う慰霊祭は年老いた戦友が集って行っているが、それでは慰霊にはなっても顕彰にはならぬ。戦没沖縄学徒にかかわるこの会名も、祭典名も、慰霊とは言はず顕彰と称するのは、まことに意義深いものがある。財団法人になるとき我が特攻の会の名称に顕彰がなくなって、平和祈願などという蛇足がついたのは、会の目的が那辺にあるのかと言はざるを得ない。

沖縄学徒の従軍者は男子一六八五名、女子五四三名、うち戦死者は男子七三二名、女子二四九名である。勿論靖国神社の御祭神である。

今回の祭文奏上者は、早稲田大学法学部三年生浜田咲智氏だった。その一部を抜すいすれば

"……中でも胸を打ちますのは、学びの庭から中学校の諸先輩は、敵の迫るを見るや「鉄血勤皇隊」並びに「通信隊」を編成して軍人となり、直に戦野に馳せ参じ、また「ひめゆり学徒隊」をはじめとする女学校の皆さんは従軍看護婦となり、最前線に於て負傷兵の看護に身を捧げ、その大半が帰らぬ身となったことであります。……

本年は沖縄戦終結より五十年の節目の年になります。本来は全国民挙げて先輩方に追悼と感謝の誠を捧ぐべき年でありますが、こともあらうに現政府はそうした先輩方のいさおに対し心を示すこともなく、むしろ歴史を断罪するの暴挙に出たのであります……

終戦五十周年を迎えた今日、私共がなさねばならぬことは、歴史を裁くことではなく国難に殉じた先輩方のお蔭で今日の平和があることに思いを致し、追悼と感謝の誠を捧げ、先輩方のいさをしを明らかにすべく大東亜戦争の真の歴史を検証していくことであると存じます……

# 記憶に残る 万朶隊のこと

菱沼　俊雄

編者註　筆者が飛行第一〇八戦隊中隊長として台湾にいた頃の手記を提供された。それは雑誌「丸」に掲載された長文のもので全文を掲載することはできないので、特攻に関係深い部分を取り出し、数回に分けて転載することにした。その都度の標題は編者がつけたものである。

昭和19年10月26日、私ははからずも陸軍最初の特攻隊である「万朶隊」を嘉義飛行場にて見送ることとなった。

鉾田で編成されたこの双軽の特攻隊は、隊長岩本益臣大尉（53期）以下すべてなつかしい顔なじみの人ばかりであった。隊員たちは前夜、岩本さんおなじみの旅館「青柳」に泊ったもようであったが、ざんねんにもわれわれはそれをしらず、知ったのはまさに出発せんとしてプロペラを回し、滑走路のはしで後続機のそろうのをまっている、そのきわどい瞬間であった。

私はピストから飛行場の草地をかけぬけて滑走路にたっし、先頭の隊長機にかけ上がって岩本さんと最後のお別れをし、また園田中尉（55期）安藤中尉（56期）ら両人は、それぞれ飛行機から降りてきてたがいに別れをおしんだのであった。

今となってはそのときの一語一語すべてをおぼえてはいないが、飛行帽の下にほおえみを浮かべていた勇士たちの顔は、いまだにはっきりと思い出すことができる。同期の安藤は、「内地にいて、いろいろ新しい飛行機に思うぞんぶん乗れたし、思い残すことはないよ」といって笑っていた。ただ一つ、後方で出発準備のおくれていた川島中尉（56期）に会えなかったのはかえすがえす残念であった。かくて、トップに長い信管をつけたこれら必死必中の特攻機群は、ごうごうたる爆音をのこして南の空に飛び去っていった。

陸軍最初の特攻隊「万朶隊」が急降下爆撃の総本山鉾田で編成された、ということは決して偶然なことではない。水平爆撃を主とする重爆の総本山浜松陸軍飛行学校に対して鉾田は、急降下爆撃を主とする軽爆の本山であって、はやくから艦船爆撃を研究していた。また海軍と提携して跳飛弾攻撃や雷撃についての研究や訓練も実施しており、研究機として海軍の急降下爆撃機である99式艦爆を借用していた。

編成当時のくわしいことは知るよしもないが、特攻隊の出現をさけがたくした一つには、ミッドウェー海戦の敗北にはじまり、ソロモン、ニューギニアそしてサイパン失陥という戦局のひっぱくと、敵航空勢力のいちじるしい優勢およびレーダーその他、敵の対空兵器の飛躍的発達によりわが航空勢力の損耗いちじるしく、しかも跳飛弾攻撃をもってしても予期したような効果をあげえず、未帰還機の比率が増加の一途をたどっており、また国内における航空機生産能力も資材不足などにより凋落をたどる一方で、これらの事情が相かさなって現出したものと思われる。十月の台湾沖航空戦においても、敵空母十数隻を撃沈破するという戦果をあげながら、三百機に余るおびただしい未帰還機を出していることなどからも、今後の艦船攻撃においては、奇襲攻撃は不可能にちかかった。しかも、敵に決定的な打撃をあたえうる近接攻撃においては、未帰還機の数はさらに激増するであろう。

それよりはむしろ、爆装して必中の体当たり攻撃をもって敵を強襲し、これと刺しちがえた方がより確実であり、有効であるという思想が、急速に作戦部内にひろがったものと考える。そして、この特攻戦法が具体化されるにあたっては、当然鉾田の研究資料が現地部隊の意見とともに重視されたはずである。最初の特攻隊を、経験の豊富な鉾田に編成させることは、いちばん手っとりばやい方法だったろう。万朶隊長岩本大尉をはじめ、園田、安藤、川島中尉、また雄健隊長になった澄谷中尉など、いずれも鉾田の研究部員をかねていた人たちである。

特攻隊の誕生にあたっては、おそらく、作戦部内はもちろん、作戦部隊のあいだでも、はげしい論争が展開されたことであろうが、詳細は知らない。ただ、われわれが薫空挺隊を編成した当時も、その効果について論じ合い、また、特攻隊についてもいろいろ考え、批判し合った記憶はある。

# 特攻隊の思出

「少年飛行兵第十三期生の歩み」より抜粋

## 八紘第八隊勤皇隊員として（2式双襲）

### 勤皇隊の概況

昭和十九年十月末ごろ鉾田飛校で編成された。十三期生から入江直澄、大村秀一、片野茂、白岩二郎、増田良次、加藤和三郎の六名の伍長が選ばれている。隊員には他に、隊長山本卓美中尉、二瓶秀典少尉、東直次郎少尉、湯沢豊曹長、北井正之佐軍曹、林長守伍長、勝又満伍長の七名がいる。十三名十二機編成であった。

十三名中十名は、昭和十九年十二月七日、フィリピン、レイテ島オルモック湾の敵艦船に突入し、戦艦一隻輸送船三隻撃沈輸送船一隻艦種不詳一隻炎上が報じられた。残り三名（加藤伍長、湯沢曹長、北井軍曹）は同月十日レイテ湾の敵艦船に突入している。

四航軍は、レイテ島周辺の攻撃で特攻機四十七機を突入させた。これで手持ちの特攻機はなくなり、内地からの後続特攻隊の到着を待たなければならなかった。

オルモック湾攻撃の十名には、特別進級と論功行賞がなされ、将校は二階級特進功三級旭五を、下士官は少尉に特進功四級旭六を、勤皇隊には感状が南方方面陸軍最高指揮官寺内寿一元帥より授与されている。

### 特攻を告げない親子の別れ（入江直澄）

昭和十九年十一月二十四日午前十時、勤皇隊の双襲十二機が鉾田飛行場を出発した。出立前隊員には休暇があり祖先の墓参りを兼ねて帰郷した。入江兵長は親一人子一人の家族であり、特攻で近く出撃することを話さずに帰隊した。死を秘して別れの心境ばどうであったろうか。想い起こすと涙が流れ出る。

この話をきいた美藤副官は次の歌を詠んでいる。

たらちねにそれとは告げで別れ来し
神鷲君は二十二歳か

入江兵長というのは、勤皇隊の入江直澄と思われる。それは、十三期に入江姓が二人いたが、皇魂隊の入江千之助には男四人の兄弟があったからである。（二編四、生徒への激励の手紙を参照）

歌の中で二十二歳になっているが、入江直澄は十九歳か二十歳であった。

### 同期ら台北で伍長に任官（勤皇隊山本隊長の日記）

昭和十九年十二月一日

兵長ら（部下）伍長に任官。「佳山」を下りて一同山の下まで送り来たる。申告も終り目的地はマルコットと決定、いざ出発しようとしたが、六号機尾部ひっこみ大慌て、二時間もおくれ盛大なる見送りの中を離陸、台北よさらば。

### 勤皇隊の出撃

レイテ島の決戦で、昭和十九年十二月六日夕刻に、わが空挺部隊は敵地内のブラウエン基地附近に降下して成功した。ところが、翌七日早朝に、わが第35軍後方のレイテ島オルモック湾に、敵輸送船団が進入し上陸を開始したのを発見した。ここにおいて、四航軍はブラウエン空挺援護作戦をやめて、オルモック湾の敵艦船群に特攻攻撃を集中したのである。

勤皇隊は、七日午前九時四十分ごろ、山本卓美中尉、二瓶秀典少尉、東直次郎少尉、入江直澄伍長、大村秀一伍長、片野茂伍長、白岩二郎伍長、増田良次伍長、勝又満軍曹、林長守伍長の双襲十機が、オルモック湾の米艦船群に突入した。

同日はこの他に、一宇隊、護国隊、八紘隊、靖国隊の十一機と、一般飛行戦隊も攻撃を敢行している。

更に勤皇隊は、十二月十日午後二時ごろ、マニラ、ニルソン飛行場から、加藤和三郎伍長、湯沢豊曹長、北井正之佐軍曹の三機が、レイテ湾の敵艦船群に突入している。これで勤皇隊の全機は消滅したのである。

この三名は、山本隊長と別れて、クラーク基地に代りの飛行機を受取りに行った下士官たちであった。

### 特別進級と論功行賞

#### 特別進級

陸軍省発表（昭和二十年一月二十四日）今般左の通発令せられたり。（△印勤皇隊、無印護国隊）

陸軍中尉　山本　卓美　△
同　遠藤　栄
任陸軍少佐
陸軍少尉　二瓶　秀典　△
同　東　直次郎　△
同　西村　正英
同　宮田　淳作
同　牧野　顕吉

同　三上　正久
同　瀬川　正俊

任陸軍大尉
（○印は同期）

陸軍軍曹　勝又　満　△
陸軍伍長　白岩　二郎　△○
同　片野　茂　△○
同　入江　直澄　△○
同　増田　良次　△○
同　大村　秀一　△○
同　黒石川　茂
同　林　長守　△

任陸軍少尉

論功行賞（護国隊の論功行賞省略）

勤皇飛行隊

功三旭五　陸軍少佐　山本　卓美
功三旭五　陸軍大尉　二瓶　秀典
同　同　東　直次郎
功四旭六　陸軍少尉　勝又　満
同　同　白岩　二郎○
同　同　片野　茂○
同　同　入江　直澄○
同　同　増田　良次○
同　同　大村　秀一○
同　同　林　長守

注　特別進級と論功行賞については、勤皇隊のみでなく、旭光隊、若桜隊、皇魂隊、誠第15隊、振武第45隊、振武第64隊もそれぞれうけているものである。

勤皇隊の感状

感　状

特別攻撃隊勤皇飛行隊

陸軍中尉　山本　卓美
陸軍少尉　二瓶　秀典
陸軍少尉　東　直次郎
陸軍軍曹　勝又　満
陸軍伍長　白岩　二郎○
片野　茂○
入江　直澄○
増田　良次○
大村　秀一○
林　長守

右の者、昭和十九年十二月七日、レイテ湾内敵艦船攻撃の命を受くるや、必死必殺の決意堅く勇躍其の途に就く。十時稍々前目標上空に進行、跳梁する敵機の下、弾雨を冒して突進し、壮烈なる体当り攻撃を敢行し、撃沈戦艦一隻輸送船三隻、撃破炎上大型輸送船一隻艦種不詳一隻の赫々たる戦果を納めたり、是至誠純忠悠久の大義に生きんとする崇高なる皇軍の神髄を発揮せるものにして、其の行真に壮烈其の武功抜群なり。
仍って茲に感状を授与し之を全軍に布告す。

昭和十九年十二月二十三日

南方方面陸軍最高指揮官

寺内　寿一

勤皇隊員の略歴

増田良次

新潟県中蒲原郡川内村矢津出身

父辰雄（四十三才）氏、母とし（四十二才）さんの次男、五泉町五泉実業学校時代少年飛行兵を志願合格、同家は男子六人女一人の子宝で、長男芳雄君は上等兵として出征中、三男猛（十六才）君は今年（昭和二十年）予科練に入隊した。

# 旭光隊（99双軽）の攻撃

## 旭光隊の概況

昭和十九年十一月ころ、フィリピン、ルソン島の飛行第75戦隊で一回目に編成された特攻隊である。十三期生から奥村常雄、中村健三、石毛秀夫、小池聖、笹田亮一、石井豊三郎、伊藤政二の七名の伍長が選ばれている。隊員には他に、隊長、長幹男少尉、大山豊司軍曹、森辰四郎軍曹、丸山芳夫軍曹、小林智軍曹の五名がいる。

この旭光隊は、フィリピン、ミンドロ島上陸をめざす敵大艦船群に対して、昭和十九年十二月十五日から同月二十九日の間に、奥村伍長、森軍曹、小林軍曹、丸山軍曹の四機が四回にわたって別の目標に突入している。

ルソン島のリンガエン湾上陸をめざす敵大艦船群に対して、昭和二十年一月六日に中村伍長機が突入し、続いて同月十二日には石毛伍長、小池伍長、笹田伍長、長少尉、大山軍曹の五機が突入している。

石井豊三郎伍長、伊藤政二伍長の二名については詳細不明である。当時、わが航空基地に対して敵機の攻撃が一日延五〇〇機以上にわたった状況下では戦死したものと認められる。

## 旭光隊ミンドロ島洋上へ出撃

昭和十九年十二月十五日、敵大兵力はミンドロ島に上陸を開始した。四航軍は十五日から三十日までの間に延九日間五十機八十八名が突入し、敵艦船に特攻攻撃を続行した。

この攻撃に旭光隊の森辰四郎軍曹機は、同月十五日ミンドロ島南洋上で突入、丸山芳夫軍曹機は同月十六日ミンドロ島付近洋上で突入、小林智軍曹機は同月二十一日バゴロド西方二〇〇km洋上で突入、奥村常雄伍長機は同月二十九日ミンドロ島南洋上で突入し四名が戦死している。

## 旭光隊と皇魂隊の出撃

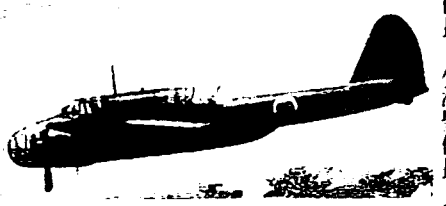
昭和二十年一月六日、連合軍の大艦

船団六百隻以上は、ルソン島、リンガエン湾に侵入した。

四航軍は、同日手持ちの特攻隊に攻撃を命じ、旭光隊99双軽の中村健三伍長機、皇魂隊2式双襲の春日元嘉軍曹機、ほか三隊四名の六機が、この艦船群への突入に成功した。

敵機制圧下の飛行場から飛び立ち、戦闘機の掩護下にある敵艦船群に突入するのは容易ではない。皇魂隊の桑原少尉編隊四機は発進まぎわに襲撃され三機が爆弾を付けたまま炎上、春日軍曹機だけが辛うじて離陸、攻撃に成功したのである。

ルソン島における特攻攻撃は昭和二十年一月十三日に終った。その前日である一月十二日に、旭光隊の石毛秀夫伍長、小池聖伍長、笹田亮一伍長と長幹夫少尉、大山豊司軍曹の五機は、富嶽隊、精華隊、皇華隊、小泉隊ら三十二機と共に、リンガエン湾の敵艦船に全機特攻攻撃を決行した。



# 青航一期生岡部三郎君 特攻出撃のこと

## ―大日本青年航空団出身 召集下士官操縦者の特攻隊員―

畠山卓次

昭二十年四月六日、敵の艦砲射撃で通信の途絶えた、沖永良部島特攻基地救援の為、百式輸送機で出動した私は。夕闇迫る午後七時三十分頃、同島近海上空で敵の戦闘機、グラマンに追い捲られている最中に、今しも沖縄周辺海域の敵艦船攻撃に向かう友軍の特攻機七～八機の編隊を見ました。

そのときの模様は前号に出してもらった拙稿「特攻基地徳之島に空中補給に出撃す」の中にも、ちょっと触れておきましたが、夕焼け雲の下を飛び行くその機影は、少々猫背にも見える九八式直協偵機であり、脚の出たその姿は、申し訳け無いがアヒルの行列の様に、哀れにも見えました。終戦後もずっと、あの時見た特攻機の機影が、私の脳裏から離れませんでした。

過日ほかのことを調べる為「特別攻撃隊」の戦没者名簿を繙いていたところ、289頁に誠第36飛行隊（九八直協）の中に伍長／岡部三郎／香川／青年航空団／大10／沖縄西方海面／20、4、6という一行を発見し、あのときの一機が岡部君だったかと、夢かとばかり驚きました。

昭和十四年春熊谷陸軍飛行学校を卒業し、同時に伍長に任官した吾々十五名は、現役兵としてそのまま軍に残り、七名程が乗員養成所の助教に、また中華、満洲航空等のパイロットとして、それぞれの途に門出しました。

その民間航空に出た者の中に、岡部三郎君も居た筈だがと、早速当時民間航空に出た、竹田、小枝、大川君等に、この様な記事を見たが、伍長とあるので、岡部君は何年頃に召集されたか？を問い合わせました。

竹田君より後記の様な返信を貰い、特攻誌の記事は、間違い無く吾々青年航空団員出身の岡部三郎君で、あったのを確認すると同時に、青航団員の中にも、特攻隊員として出撃した者が居た！、それも軍に残った吾々の中からでは無く、一旦は民間パイロットとして活躍し、召集を受けて、特攻隊を志願して出撃した、岡部君であろうとは、感慨無量です。

竹田君の返信には、昭和十九年春頃召集された、とありましたが、出撃時の伍長の階級からして、召集されたのは十九年中頃過ぎと考えられ、何処の部隊に召集されたかも分かりませんでしたが、別誌の「天号作戦一で、誠第三十六・三十七・三十八飛行隊は、昭和二十年二月十日、太刀洗陸軍飛行学校にて編成され、隊長は教官が、隊員は生徒だったとあり、第八飛行師団に配属された。共に九八式直協偵にて、四月六日午後五時新田原飛行場より出撃した、とありました。

これにより前記、夕闇迫る徳之島上空で、小生の見た友軍の特攻機は、出撃日、機種に違い無く、発進時刻からして徳之島付近到達は、午後七時～七時三十分となり、その総てが符合しており、私の見た特攻機、しかもその編隊の中に、岡部君の搭乗機があったとは、余りにも奇しき因縁でありました。

なお竹田君の書信には、

終戦後三十年余り経って、米国の元軍医なる人から、日の丸の旗が送られて来て、それが岡部君の遺体の首にあったことが分かった。

軍医であった其の人の話しでは、「其の日の戦いも終わったと思った頃、夕闇の中から突然、日本の飛行機

が現れ、軍医の輸送船に体当たりして来たが、翼端だけが船体に当たり、飛行機は海に落ちた。その時操縦士を引き上げたが、既に死亡していた」とのことです。

防衛庁の戦史部の人が私を訪ねて来られ、民間人の特攻隊員とは初めて知ったと、岡部君の事について、いろいろ聞かれましたのでそちらの戦史の一端にも載っていると思います

と書き添えられていました。

岡部君のご冥福をお祈りして

この項終ります。

岡部君！　霧ケ峰でグライダーを飛ばした当時から、熊谷飛行学校での中練、九五戦の特殊飛行の訓練中も共に語り夢見たのは、第一線で活躍する戦闘隊のパイロットだった。君の性格からして、日航に入社して直ぐに退社したのも、民間の水が合わなかったことと頷ける。養成所教官時代の教え子の、特攻出撃にいたまれず、指名で無く自から志願したものと推察します。

君の温顔、特に話す時の笑顔が、今も髣髴として眼前に浮びます。

謹んでご冥福をお祈り致します。

故「岡部三郎君略歴」

（竹田君の書信をもとに小生が纒めたものです）

昭、一二・　八　香川県出身、大日本青年航空団員として、第一回霧ケ峰訓練大会にてグライダー教育を受ける

昭、一二・一二　同団飛行機操縦教育羽田班にて、操縦教育を受ける

昭、一三・　七　同校卒業、二等飛行機操縦士免状下付さる

昭、一三・一二　航空兵科予備役下士官候補者として飛行第七戦隊に入隊

熊谷陸軍飛行学校に入校

昭、一四・　五　同校卒業、任陸軍伍長　同日除隊　航空局職員として阪神飛行学校にて助教勤務

昭、一五・　四　松戸中央乗員養成所に一期生として入校

昭、一六・　三　同校卒業、日本航空に入社（二ケ月にて退社）

昭、一六・　六　京都乗員養成所に教官として勤務

昭、一九・夏頃応召　太刀洗陸軍飛行学校に助教として配属さる

昭、二〇・四・六　陸軍特別攻撃隊誠第三十六飛行隊員として沖縄西方海面に出撃戦死し、陸軍少尉となる

# 追憶　久住　宏君

72海兵期

池袋赤心堂病院院長
会員　柳澤　浩氣

故久住宏君は、私にとって忘れる事が出来ない鮮烈な印象を残してくれた従兄であった。

彼は私の母の兄の次男であって、私の家がある川越市から程近い地主の家に生れ、私より二歳年長だった。

幼児の時から私を可愛がってくれ、私も彼の家を訪ねて遊ぶ事が非常な喜びであった。彼が小学生低学年で、私が就学前の頃、午前中から彼の家に行って、その帰りを待っていた事をなつかしく想ひ出す。彼との遊びの中で、二人が一番好きだったのは「軍艦ごっこ」であった。多くの場合万年筆の入っていた箱を軍艦にみたて、中におはじきを入れ、それを軍人にみたて、二人で適当な所に配置く、適当な事を言って相手の舟を沈めてしまう、いはば図上演習の極く幼稚な遊びで、時がたつのを忘れたものだった。

その久住君は府立九中（現北園高校）を卒業して、彼の初志を貫き海軍兵学校に進んだ。その頃真珠湾で特殊潜航艇で戦死した九軍神を「これこそ本当の軍神だ」と語っていた。

昭和19年12月28日頃だったと思ふが、当時北海道大学医学部の学生で年末休暇で帰省していた私を、突然海軍中尉の軍服姿で尋ねてくれた時の事を今でもはっきり憶えている。彼は物静かな口調で

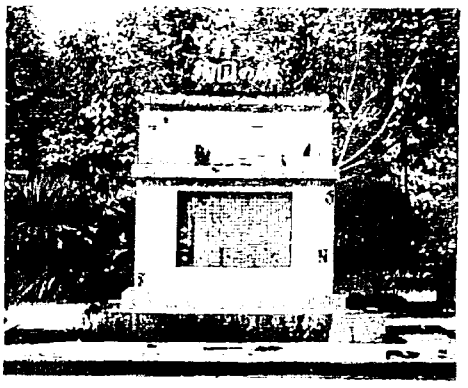
「残念乍らこの戦争は負けた。そして浩ちゃん（私は彼からそう呼ばれていた）科学力のない国民がどんなに惨めなのかやがて分るよ。浩ちゃんは僕と違って医学部の学生だ。いはば科学者の卵だろう。日本の科学の振興を頼むよ」と言ってくれた。そして海軍式の挙手の礼を交して、私の家の門前を去ったのが彼と会った最後であった。

あとから聞く所によると、その年の12月30日に呉を出港した潜水艦に搭乗して、昭和20年1月12日、特攻兵器「回天」に乗って、パラオ島のコッソル水道で初志を貫徹して散華したとの事であった。

想えばあれから、既に半世紀の時が流れた。彼が私に期待した日本の科学の振興等とは全く無縁な、平凡な開業医の生活を送っているが、せめても彼に応えられたのは、私財を寄附して、池袋の地に特別養護老人ホーム「養浩荘」を設立し、老人福祉の為に、ささやか乍ら貢献している事であろうか。

# 特攻殉国の碑

## 海軍の水上水中特攻



### 碑文

昭和十九年、日々悪化する太平洋戦争の戦局を挽回するため、日本海軍は臨時魚雷艇訓練所を横須賀からこの地長崎県川棚町小串郷に移し、魚雷艇隊の訓練を行なった。

魚雷艇は魚雷攻撃を主とする高速艇でペリリュー島の攻撃、硫黄島最後の撤収作戦など太平洋、印度洋に活躍した。更にこの訓練は急迫した戦局に処して全国から自ら志願して集まった数万の若人を訓練して震洋特別攻撃隊、伏竜特別攻撃隊を編成し、また回天蛟竜などの特攻隊員の練成を行なった。

震洋特別攻撃隊は爆薬を装着して敵艦に体当りする木造の小型高速艇で、七千隻が西太平洋全域に配備され、比国コレヒドール島沖で米国艦船四隻を撃破したほか、沖縄でも最も困難な状況のもとに敵の厳重なる警戒を突破して特攻攻撃を敢行した。伏竜特別攻撃隊は単身潜水し水中から攻撃する特攻隊でこの地で訓練に励んだ。

今日、焼土から蘇生した日本の復興と平和の姿を見るとき、これひとえに卿等殉国の英霊の加護によるものと我等は景仰する。

ここに、戦跡地コレヒドールと沖縄の石を併せて、ゆかりのこの地に特攻殉国の碑を建立し、遠く南海の果てに若き生命を惜しみなく捧げられた卿等の崇高なる遺業をとこしえに顕彰する。

# 第29回 特攻殉国者慰霊大祭

去る5月14日長崎県川棚町に在る「特攻殉国の碑」碑前にて慰霊大祭が執り行われた。当日は生憎の雨天でしたが、県知事、川棚町長、地元国会議員、佐世保地方総監をはじめ多数の来賓と二百名近くのご遺族、それに震洋会々長田中和氏一行もパスでお見えになり回天関係者等碑前一杯の参列者で大変盛大な慰霊祭が厳粛に執り行われた。当協会からも最上理事長が協会を代表して参列した。

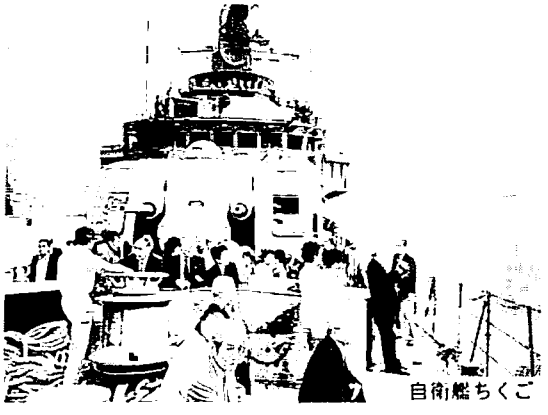
海上自衛隊の音楽隊の懐かしい曲の演奏があり、又儀杖隊の部隊参拝等海上自衛隊の絶大なご協力により一段と慰霊行事が盛り上った。

翌十五日の海上慰霊祭は曇天ながら静穏な日和に恵まれて三百十名の遺族と会員が自衛艦「ちくご」に乗せて頂き、佐世保港外で厳粛に挙行され、ご遺族様達はひとしく感激し悲しみも新たになされておりました。在天の英霊も嘸喜んでくれたことと思います。

特攻殉国の碑保存会会長相田英雄様、同事務局長西村金造様始めお世話を下さった関係皆様に厚く御礼申し上げます。

（最上記）

海上自衛隊佐世保地方総監と儀仗隊



自衛艦ちくご

# 解説・特別攻撃隊

## ―「オールネービー」より転載

### 特別攻撃隊とは何か

特別攻撃隊の攻撃が何故「特別」であるのか。それは「脱出不可能」な状態で「必ず死ぬ」状態で戦果を挙げようとしたからである。

戦場において、一瞬の判断で自らを犠牲にし敵に体当たり攻撃をしたという例は多々あるが、攻撃の始まる前から体当たりを前提とした組織的な攻撃は、日本しかなかったとされている。

特別攻撃隊は形式的には志願制により編成された。そして敵への体当たり攻撃を行った場合のみ、特攻による戦死とされ、二階級特進という栄誉が与えられた（例えば、少尉の時に特攻死すると、中尉を飛び越えて大尉に任じられた）。そのため、体当たり攻撃前に撃墜された場合などは、特攻死とはされず、進級も一階級にとどまった。

特別攻撃隊の呼称が初めて用いられたのは、真珠湾攻撃の際の特殊潜航艇による突入まで遡る。ただ、この場合は帰還する可能性を残したため、右に定義した特別攻撃隊とは、性質を異にする。戦艦大和の出撃も特攻的性格は持っていたが、厳密な意味では特別攻撃隊とは違うというべきであろう。

いずれにせよ、特別攻撃隊の隊員になった瞬間から体当たりするまでの当事者の心情は、想像するに難く言葉にできない。

### 特別攻撃隊の出現背景

特別攻撃隊が初めて出撃したのは一九四四年十月レイテ沖海戦に際してである。その時、特攻戦術の実行を命じたのが、第一航空艦隊司令長官大西瀧治郎中将であった。

大西は特攻隊の生みの親と言われているが、体当たりといった戦術はすでに昭和十八年頃から各方面で考えられており、特攻兵器の開発は水面下で行われていた。

彼が海軍航空本部総務部長に在任中、海軍は南太平洋方面において航空機の消耗戦に突入し、補給不足による兵力減少と熟練パイロットの戦死者増加で、航空戦力はガタ落ちとなってしまった。

その結果、戦局は悪化の一途を辿り始めた。この戦局挽回の一方策として、航空関係者の間で、体当り攻撃を主張する者が出てきた。「一発必中」つまり命中率を高め、敵空母などの大型艦船を撃沈することが期待された。

大西は当初、特攻精神の必要性を説いていたが、その実施は避けるべきである、という主張の持ち主であった。そのため特攻作戦の使用と特攻志願を認めなかった。軍上層部としても実行に踏み切れないでいたのである。

しかし、必死必殺戦法を取る以外に戦局挽回の道はない、という考え方が戦局の逼迫と共に高まっていき、航空関係者に信望があるということで、大西が断を下すこととなった。その時の大西の心情は、特攻隊を見送った際の言葉に表れている。

「前途のある若い人達を死に行かせる。これしか戦術を思いつかないのは、上官として最高の愚者だ。こういう戦術は外道なんだよ。百年たっても、私は知己を得ないだろうね」。かくして一九四四年一〇月二〇日、「特別攻撃隊」が発進した。

### 特別攻撃隊の種類

〈空からの特攻〉空からの特攻は航空機による特攻と、特殊兵器によるものと大きく二つに分けられる。

まず前者について海軍で使用されたのは、「零戦」「彗星」「銀河」「天山」「流星」などで、いずれも大型爆弾を抱えて体当たりする方式である。戦争末期となると、「白菊」「九三式中間練習機」などの練習機まで狩り出された。

陸軍では「隼」「九七式戦闘機」「飛燕」「疾風」などが特攻機として使用され、海軍同様、大型爆弾をつけて体当りする攻撃が行われた。また、大型機で敵中に強行着陸をし、斬り込みを実施した特攻もあり、これは「空挺特攻」と呼ばれた。その他に、B29爆撃機に対して、体当り攻撃を行った特攻も存在する。

以上は、航空機を特攻に転用したものであるが、その一方で特殊兵器も開発されていた。海軍の「桜花」「橘花」「藤花」「神龍」「梅花」などがそれである。

「桜花」はロケット型特攻機で、母機の胴体に携行し目標附近まで進み、ここで母機から切り離され、猛烈な速度で滑空攻撃していく特攻機である。実際に使用されたのはこの「桜花」の

みで、「橘花」以下は実用には至らなかった。

〈海からの特攻〉水上攻撃と水中攻撃とに別れる。

水上攻撃の場合、海軍の「震洋」と陸軍の「連絡艇」は呼称こそ異なるものの、両者とも一人乗り小型特攻用モーター・ボートで構造的にはほぼ同様であった。唯一の違いは前者が艇首に炸薬を積んだのに対し、後者は艇尾に積んだ点にある（本紙注・震洋艇は一型一人乗りのほかに二人乗りの5型がある。陸軍連絡艇マルレの後部に積載は炸薬ではなく、二五〇㌔爆雷である）。

水中攻撃に関しては、真珠湾攻撃の際にすでに実戦投入されていた「特殊潜航艇」がある。「回天」は人間魚雷と呼ばれたもので魚雷を改造し、人間が搭乗して潜航しながら敵艦にぶつかるというものであった。

次に「海竜」は両翼つきの二人乗り小型潜航艇であり、水中飛行機ともいうべき潜水艇であった。また「震海」は吸盤または磁力によって艇首に装備した爆薬を敵艦船に固定して退避しようとするものが特攻に転用されたが、実戦投入に至らず敗戦を迎えた。

最後に「伏竜」であるが、これも「海竜」同様、実戦投入に至らなかった。

## 海軍航空機に搭乗し対航空機体当り攻撃を敢行し、その功顕著なりと聯合艦隊布告による二階級特別進級者

飯野伴七調べ

海軍航空機の特性上、対艦船攻撃体当りの二階級特別進級者の方が多いが、茲では航空機攻撃関係のみに限る。

布告　第一〇号

〝台南空〟戦闘機操縦員、一飛兵　水津三夫　操練54期

17・7・14「ニューギニアラエ」「ラエ」上空哨戒中B―25 11機来襲、指揮官機に体当り撃墜、戦死す。

布告　第二九号

〝932空〟（マカッサル派遣隊長）艦攻操縦員　予中尉　木野宥治　予学7期

18・6・26　マカッサル

〝932空〟艦攻偵察員　二飛曹　眞鍋鶴夫

乙飛12期　18・6・26　マカッサル「マカッサル」に大型機16機来襲、一番機に体当り撃墜、戦死す。

布告　第三二号

〝翔鶴〟戦闘機操縦員、一飛曹　大森茂高　操練33期

17・10・26　南太平洋海戦

南太平洋海戦に於て上空直衛中、来襲せる艦爆数機を撃墜せるも敵の一機が将に爆弾を投下せんとするを認むるや之に体当り撃墜戦死す。

布告　第三五号

〝瑞鳳〟戦闘機操縦員、飛兵長　収正直　丙飛3期

18・3・3　「ラエ」沖

輸送船団上空警戒中、爆撃機7戦闘機1来襲、爆撃機に体当り撃墜、戦死す。

布告　第六九号

〝252空〟戦闘機操縦　大尉　中間栄博

海兵70期　19・10・21　硫黄島

硫黄島にて27航戦司令官指揮のもと、大型機邀撃戦参加19回、「B―24」爆撃機撃墜2機、撃破3機の戦果をあげしが、体当り撃墜戦死す。

布告　第一五〇号

〝343空偵4〟偵察機彩雲操縦員、少尉　高田　満　乙飛6期

20・3・19　土佐沖

〃　偵察員　上飛曹、影浦博

乙飛16期　20・3・19　土佐沖

〃　電信員　上飛曹、遠藤稔

甲飛10期　20・3・19　土佐沖

四国南方に来寇せる機動部隊の偵察に任じ、土佐沖にて捕捉接触しその全貌を明かにす。

帰投の途次約100機の艦載機に遭遇するも被弾の為帰投困難と知るや敵編隊群れに突入体当り攻撃により2機を撃墜、自爆戦死す。

布告　第一六八号

〝252空〟戦闘機操縦員、一飛曹　渡辺雄平　丙飛11期

20・4・7　千葉県香取郡

「B―29」関東地区に来襲その11機編隊を捕捉、肉迫攻撃を反覆せる後その一番機に体当り攻撃を決行、撃墜せしめたる後、自らは火煙に包まれつつ最後迄愛機を操縦し被害最小と思はる畑地に突入、戦死す。

布告　第一七五号

〝252空〟戦闘機操縦員、飛兵長　小沢清

特乙1期　20・2・8　硫黄島

「B―24」爆撃機各10機よりなる編隊2群硫黄島に来襲。之を阻止せんと単機敵中に突入、体当り攻撃を敢行、撃墜するも戦死す。

布告　第一九八号

〝343空〟戦闘機操縦員、上飛曹　須崎重夫　丙飛11期

20・8・8　福岡県太宰府

戦爆連合約300機北九州に来襲、紫電に搭乗邀撃に発進。「B―29」10機編隊を捕捉し1機に黒煙を吐かしめたる後、一番機に体当り撃墜、戦死す。

布告　第二三七号

〝302空〟夜間戦闘機操縦員、中尉

久保田謙造　海兵73期　20・5・24
〃　偵察員、少尉　田中清一
夜間「B—29」帝都に来襲するや、その一機に体当り攻撃を敢行し撃墜、戦死す。
陸軍防衛総司令官布告
佐世保司令長官表彰

〃352空〃　戦闘機隊操縦員　指揮官
中尉　坂本幹彦　海兵71期
19・11・21　長崎県大村
在支米空軍西九州米襲に際し之を大村上空に邀撃し、その一機に体当り攻撃を敢行し撃墜するも戦死す。

# 甲種幹部候補生（操縦）と特攻戦死者の調査

岩田辰夫　幹候九期

## 幹部候補生制度の変遷の概略

戦時ないしは事変に際し、当然増員されるであろう部隊の初級将校の補充源であった幹部候補生制度の前身とも言うべき「一年志願兵制度」は、明治20年の「徴兵令」改正時に制定され、部隊の教育により予備少尉に任官していた。「食事に当てる為若干の経費を納入したので、「お金で少尉になれる」といわれた時代である。

昭和2年「兵役法」が制定された時、新たに「幹部候補生制度」が採りいれられた。経費自弁は廃止されたが、内容的には前の制度を踏襲していた。

昭和12年、支那事変が勃発、軍備拡張にともない、幹部候補生の採用も増加し、従来の部隊内教育が困難となり、昭和13年制度の大改正により、幹部候補生の教育機関としての予備士官学校が創設された。すなわち昭和13年4月、盛岡、豊橋、久留米に予備士官学校を開設して歩兵と野山砲兵の教育を開始し、その他の兵科は各実施学校が担当することとなった。

## 甲種幹部候補生の総員数

支那事変から大東亜戦争に発展する間に、下級将校の大半が幹部候補生出身の将校によって占められるに至り、まさに第一線の部隊の骨幹は、これらの幹部候補生出身者であった。しか

甲種幹部候補生操縦転科一覧　昭和18年11月1日と19年2月に操縦転科した幹候のみを計上（下記の注参照）

| 期別 | 7　期 | | | | | 8　期 | | | | | 9　期 | | | | | | 期不明 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 入　校 | 18.11—19.2 一部19.7 | | | | 19.3 一部 | 18.11—19.2 一部19.7 | | | | 19.3 一部 | 18.11—19.3 | | | | | | | |
| 教育隊名 | 木脇 | 仙台 | 宇都宮 | 熊谷 | 計 | 木脇 | 仙台 | 宇都宮 | 熊谷 | 計 | 木脇 | 仙台 | 宇都宮 | 熊谷 | 菊池 | 計 | | 合計 |
| 人　員 | 38 | 50 | 40 | 50 | 178 | 37 | 50 | 40 | 50 | 177 | 74 | 150 | 100 | 100 | 246 | 670 | | 1,025 |
| 補遺版 | | | | | 11 | | | | | 18 | | | | | | 65 | ＊4 | 98 |
| 岩田調査 | 7 | | 2 | 2 | 11 | 5 | 1 | | 6 | 12 | 10 | | 3 | 4 | 35 | 52 | | 75 |
| 学校不明 | | | | | 1 | | | | | 6 | | | | | | 13 | ＊4 | 24 |
| 岩田の計 | | | | | 12 | | | | | 18 | | | | | | 65 | ＊4 | 99 |

二重線以下は，幹候出身突入特別攻撃隊戦死者の数を示す。「陸軍航空の鎮魂総集編・補遺版」の人員を期別・出身基本学校別に並べかえたもの。
＊出身学校不明・期別不明24名中に，11期生1名含む。
注：酣燈社版「日本陸軍戦闘機隊」新改訂増補版によれば，操縦学生78期（14.4～15.1）に陸士50期と幹候4名。幹候（14.6～14.11熊谷8名）。幹候（15.7熊谷入校，15.12岐阜卒）戦闘班5名。幹候7期（17.2～17.7岐阜）人員不記載，学飛連出身で，後に操候7期として幹候とは別の名称で呼ばれる。

出身校別・期別特攻総括

| | 7　期 | 8　期 | 9　期 | 11　期 | 期不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 木　脇 | ＃7 | 5 | 10 | | | 22 |
| 仙　台 | | 1 | | | | 1 |
| 宇都宮 | 2 | | 3 | | | 5 |
| 熊　谷 | 2 | 6 | 4 | | | 12 |
| 菊　地 | | | 35 | | | 35 |
| 出身校不明 | 1 | 6 | 13 | 1 | 3 | 24 |
| 計 | 12 | 18 | 65 | 1 | 3 | 99 |

＃①総集編P80第27振武隊奈良又男特操1期は誤り，木脇出身7期が正。

し、甲種幹部候補生の実数について纏められたものはない。

前橋予備士官学校の記録によれば、6期から12期まで五千八百余名を教育している。また、別な資料によれば、兵科各部の採用数は、昭和13年から18年までに、四万二千名という。ちなみに、終戦直前の教育機関数は、予備士官学校七、各科諸学校二三、各科幹部候補生隊二七、合計五七に達している。また、何名が予備役将校として活躍したかという確かな数字もない。

日清戦争以来、三十八万名という数字もあり、終戦時の陸軍将校二五万余名の内幹部候補生は二〇万に近いという記録もある。

## 一期生、一回のみ幹候の操縦転科

昭和18年7月航空要員の拡充のため、特別操縦見習士官（特操）を採用することが決まり、10月1日、各飛行学校教育隊に、一期生二千五百が入校した。（四期までが採用され、およそ八千名という）

特操に遅れること一か月、幹部候補生の操縦転科は昭和18年11月1日付で発令されている。七、八期は予備士校を終了し所属の隊から、九期は在校中に転科している。この時、何名が操縦転科したのか、その総数については、今もって不明である。

また、幹候の操縦転科はこの一回だけ、一期生だけで二期はない。したがって総数は比較的把握しやすいと考えたが、昭和60年に思いたったことなので、すでに時期を失していて未だに正確な数はわからない。

その後縁あって、特攻隊戦没者慰霊顕彰会（財団法人・特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の前身）の行事に参加し、我々が操縦転科時の航空総監部の教育課長であった故秋山紋次郎さんに、昭和60年末ごろにお会いし、「幹候の操縦転科の総数は?」とお尋ねしたところ、「忘れた」というお答えで、ついに、詳細はお聞きできなくなってしまった。

しかし、平成2年、幹候が市ケ谷の陸軍航空碑碑前祭の実行委員を担当したことを契機として、大刀洗・宇部宮・熊谷・仙台の各飛行学校出身の戦友会代表が相会し、会合を重ねるうちに幹候の操縦転科およそ一千有余名が在校したことが判明した。総数については、特に仙台飛行学校の人員が不明のためおよそ一千有余名としか表現できない状態である。

## 幹候の特攻戦死者数

昭和52年発行の、生田惇著「陸軍特別攻撃隊史」を知ったのも、発行から十年以上も経ったころであった。同書により幹候の特別攻撃隊戦死者の数について集計してゆくうちに、特別操縦見習士官として表記されている幹候の数が相当数に及ぶことも判明した。たしか一八名にもなるので、著者に訂正をお願いしたら、著者の原稿は訂正するが原文は「厚生省の名簿」のままである旨の回答があった。

その後、特攻慰霊顕彰会編「特別攻撃隊」第三版や陸軍航空碑奉賛会編「陸軍航空の鎮魂・総集編」で、幹候と特操の異同は訂正を終了した。とくに後者においては、幹候とされていたものが、実は「操学」という身分であることを把握し、「補遺版」をもって訂正した。

幹候と特操の混交混同は著書の上のみならず、当時の隊長、教官、助教の方々の間でも今も混乱が続いている有様なので、敢えて、記述した。

## 期別・出身数育隊別特攻戦死者調

操幹一期会の結束がたかまりゆく中で、期別・出身教育隊別による特攻戦死者の実像が判然となりつつある。別表はその成果である。幹候九九柱に対し、特操の三一三柱より、三分の一以下ではあるが操縦転科の総数からすれば、率としては同じくらいか、もしくは高い割合を占めているのではなかろうか。

新しい資料も乏しく、旧陸軍から厚生省に移管となった書類のなかにも、齟齬・錯誤があって今や訂正するすべもない。元の書類を直すことも至難ながら、流布した多くの著書を一々訂正することも煩瑣である。今や、幹候仲間からの聞き書き、記憶が唯一の頼みの現状である。

「操幹一期会」については主として操縦転科について記述してきたが、「操幹一期会」は操縦のみならず、航法、偵察、気象、防空、通信、航測、飛行場設定、飛行場大隊、飛行場中隊等々のあらゆる航空関係諸部隊に転科された方の入会を歓迎している。（入会費なし、年一回、11月1日の総会のみ）

新規加入者の参加により新たな情報が採取され、空白を埋める可能性が生まれてくるのを期待するからである。なにぶんにも、幹候の出足の遅延によるもので致し方ないが、航空関係幹候の総力を結集し、より正確な資料に基づく幹候の全体像を把握したいものである。

連絡、ご意見は左記まで
岩田辰夫　〇三-三七〇二-八〇九八

追悼・感謝・交友

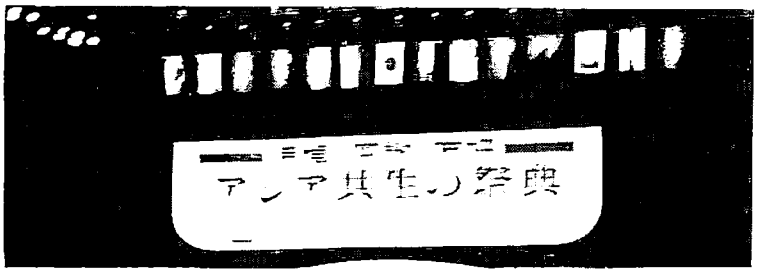
# アジア共生の祭典

## ―特攻慰霊の悲願　ここに結実―

古井貞方

5月29日

於武道館




今日の平和と繁栄の礎となったわが国及びアジア諸国の戦没者に対する追悼、アジアの独立と興隆発展に寄与したすべての人々に対する感謝及び共生共栄の精神を基調とする未来への友好を主旨とする主催者の『アジア共生の祭典』が、「終戦五十周年国民委員会（加瀬俊一会長）」主催、「終戦五十周年国会議員連盟（奥野誠亮会長）」、「正しい歴史を伝える会国議員連盟（小沢辰男会長）」後援で五月二十九日、東京北の丸公園の日本武道館で開催された。

朝から生憎の雨であったにも拘らず、あの八角形の大ホールが、三階まで立錐の余地もない程に、国会議員関係者百六十一人を含む約二万の参加者で埋まった。

三党野合の村山政権が、謝罪決議を強行しようとする非国民的暴挙に対する国民の怒りが、如何に大きいかを物語る証拠である。

北側の一辺に設けられたステージの奥には白い菊花が飾られた。その向って右には、わが国と共に、白人の侵略をよせつけなかったタイ王国の代表元副首相兼外務大臣タナット・コーマン閣下を始め、戦後民族独立の悲願を果したインド、ミャンマー、インドネシア、マレーシア、パキスタン、バングラデシュ、ブータン、ネパール、スリランカ、中華民国、更にはベトナム、カンボジア、ラオスに至る計十四カ国の代表（駐日大使、元大臣等）多数が席を占めた。いまだに中共の圧政下に呻吟するチベットの前総理大臣テンジン・テトン閣下はオブザーバーとして参加した。

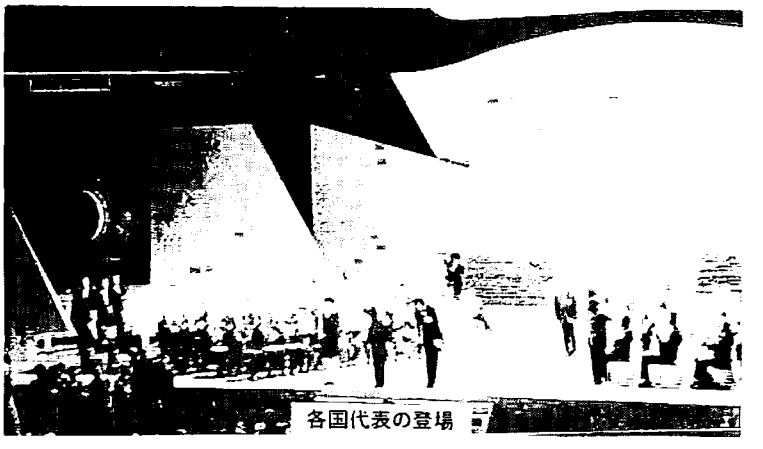
主催者側代表及び自民党、新進党等の国会議員は左側に席を占めた。

又ホールの中央には、参加国の新鮮な国旗が誇らしげに天井から吊されている。日の丸のわが国旗が、その中央にあった。新生アジアの将来を象徴するかのようであった。

これらの国々の中には、戦中の昭和十八年十一月、東京において開催された大東亜会議に代表を送り、米英の大西洋憲章に対し、大東亜戦争の目的が、アジアの解放にある事を宣明した『大東亜共同宣言』に加っていた国もある。タイ国からワンワイ殿下が、インドからは独立の英雄チャンドラ・ボース氏が、ミャンマー（当時はビルマ）からは独立の父バー・モー氏が参加していた。

祭典の詳細は省略するが、第一部の「追悼」の儀式に続き、第二部の冒頭で、加瀬俊一国民委員会々長が主催者式辞を述べた。

加瀬会長は、前述の民族解放宣言ともいうべき大東亜共同宣言を、当時の外務

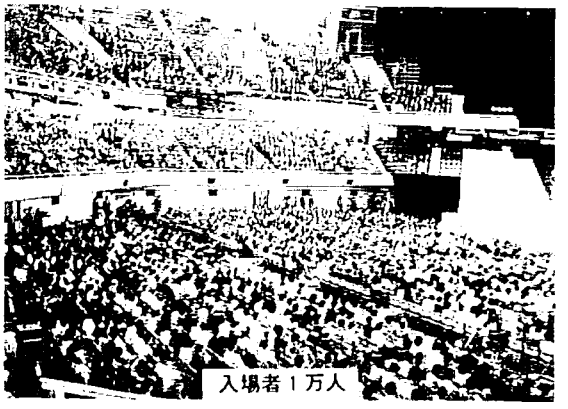

各国代表の登場

大臣重光葵の指示をうけて英文で起草した本人である。その歴史的意義を熱誠を込めて語った。

共同宣言の末項には、「万邦と交誼を篤うし、人種差別を撤廃し、あまねく文化を交流し、進んで資源を開放し、以て世界の進歩に貢献す」とあった。曾つて欧米諸国が行った侵略、殺戮、収奪、圧迫の植民地支配とは根本的に異る。今日においても堂々と通用する優れた国際的宣言と言うべきである。同氏の言によれば、この宣言を、重光外相の内奏によって聞かれた昭和天皇は諒承遊ばされたという。

更に同氏の言によれば、この民族解放宣言の精神が、一九五五年（昭和三十年）四月、インドネシアのバンドンで開かれたAA（アジア・アフリカ）会議に継承されたというのである。この会議でのバンドン宣言十項目は、この精神を内に秘めて日本（同氏はその代表のひとり）が提示したものであり、中華人民共和国代表の周恩来も支持し、万雷の拍手をもって採択されたという。そうして同会議に出席した各国代表は、日本が民族解放のため勇戦したお陰で独立ができたのだと、異口同音に、熱烈に感謝したという。

祭典参加国の中、タイ王国、マレーシア、インド及びインドネシア共和国の四ヶ国代表が挨拶したが、何れもその独立がわが国の貢献する所と感謝した。


入場者１万人

タイ王国代表は「世界の至る所で植民地支配が打倒されたのは日本が第二次大戦を戦ってくれたおかげである。」と証言した。

マレーシアの代表は「当時生まれていなかった世代に戦争の責任を負わせてはならない。特定の国だけに戦争の責任をかぶせてはならない。」と主張し、更に「日本は東南アジアの独立を大きく助け、自活の仕方を教えてくれた。日本は我々にとって教師だったが、現在は自信をなくしているよう

## アジア共生・東京宣言

有史以来、人類の文明の主軸はアジアにあった。

その歴史は、エジプト、メソポタミア、インド及び中国に発祥を見た。アジアは、世界の偉大な宗教や哲学を生み出し、豊かな精神文化を誇ってきた。

また、アジアの海は世界の主要な貿易船が行き交う、最も繁栄した商業の海であった。アジアは自然の恵みに満ち、世界の人々がその多彩な物産にあこがれる文明の先進地域に他ならなかったのである。

このようなアジアを、「屈辱のアジア」へと転じさせたものこそ、欧米列強による植民地主義であった。アジア諸地域の多くが、苛酷な支配の下に置かれ、人々は貧困の極みに、国土は荒廃の只中に追いやられたのである。

耐えがたい屈辱は、民族の覚醒をよび起こす。二十世紀アジアの歴史は、日露戦争にはじまるアジア民族覚醒の歴史でもあった。

しかし、その道程は決して平坦であったわけではない。そこには大東亜戦争をはじめとする幾多の試練があり、苦難に満ちたアジア独立への戦いがあった。

われらはここに、この偉業にいのち捧げた勇士たちを、深甚なる敬意をもって想起し、その崇高なる努力と献身に感謝の誠を捧げるものである。

かの日々より半世紀、アジアは今、成長するアジアへと大きく変貌を遂げようとしている。そこにあるのは、新しいアジアの躍動であり、同時にアジア複権のドラマである。

人間と自然の調和、伝統と現状の共存、文化に深く根ざした経済、そして民族と民族の調和、アジアに特徴的なのは、こうした異質なものの「共生の世界」である。これこそ、長い歴史の中で培ってきた偉大な精神文化であり、その遺産が、今一斉に花開こうとしている。

この「共生の世界」を、地球的規模で実現していくのが、われらの課題である。かくしてアジアは、世界の平和と繁栄の懸け橋として、二十一世紀にむけての新しい使命を担わなければならない。

終戦五十年を機に、この「アジア共生の祭典」に集ったわれらは、今、それをアジアの友人たちとともに、世界に向かって高らかに宣言するものである。

平成7年5月29日

だ。もっと心豊かな国になってもらいたい。」と激励ともとれる苦言を呈した。

又、同代表は戦争当時十代の少年であったが、進駐した日本軍の兵隊さんから日本語と日本の歌を習ったと昔の思い出を語ってくれた。筆者も当時担当警備地区内の小学校に、日本語の時間を設けて貰い、適任者を派遣した記憶がある。

我々は聖戦と信じ、大東亜共栄圏建設の一翼を担っているとの自負と誇りを持ち、地域内の治安確保に精励し、地域住民との友好親善に努めていた。それを『侵略戦争』とは、真実の歪曲も甚しい。

又、インドネシアの代表は「多くの日本の青年たちがインドネシアの独立のために戦い、尊い犠牲を払ってくれた。」と、感謝と追悼の意を表した。

二つの国会議員連盟の代表は、当然ながら、大東亜戦争を、アジアの国々を白人の植民地支配から解放したものと位置づけ（奥野誠亮）、今日の日本の発展は英霊の犠牲によるものと感謝し（永野茂門）、一方的断罪に基づく「反省」と「謝罪」には反対する（粕谷茂）と約束した。

最後に『アジア共生・東京宣言』が発表された。詳細は別掲のとおりであるが、大意とするところは以下のようである。

人類の文明の主軸であったアジアを、屈辱のアジアへと転落させたのは、欧米列強の植民地支配であり、貧困と荒廃のアジアに、民族の覚醒を呼び起こしたのは実に、日露戦争の勝利であった。小国日本、後発の有色人種の国日本が、白人のロシア大国に勝利した事は、今日の発展するアジアへの変貌の最初の引金であったのである。そうして欧米宗主国を追放した大東亜戦争こそ、独立の夢に現実の可能性を与えたのである。

社会党の久保書記長は、二十九日の記者会見で、本祭典に関連し、「結果として植民地を解放することになったとしても、正義の戦争だったとは言えない」等と批判しているが、己が不勉強を棚に上げ、無知蒙昧極まる非礼な暴言としか云いようがない。後に続く者を信じ莞爾として国難に殉じた諸英霊の遺徳を冒瀆すること之より大なるはない。かかる輩にわが国政を託することは国民の恥辱である。

幾多の試練と苦難の上に独立を勝ち得たアジアの諸民族は、今や世界の平和と繁栄の懸け橋として二十一世紀へ向けて。新しい使命を果そうと燃えているのである。アジア独特の精神文化を中軸として。

村山野合政権は愚かにも、東京裁判史観の虜となり、党利私利のみに狂奔し、一部特定国の干渉に右顧左眄し、己が売国的行為に気がつかず、偏狭の史観をもって己が祖国の栄光の歴史に、敢えて汚名をかぶせようとしている。英霊を冒瀆し、子孫に不名誉と故なき負債を負わせようとしている。断じて許すことはできない。

マスコミの報ずるところによれば、（六月十日現在）与党三党は、決議文の字句の調整に狂奔しているが、決議文の背後にある歴史観こそが問題なのである。ましてや独立国の興亡に係わる歴史観は、深く長い考察検証の上に初めて確立されるものである。戦勝国が己に都合のよいように捏造した史観の横行を許容し、特定国からの明かな内政干渉に屈して来たわが国歴代内閣の罪を、終戦五十年の今日、我々は追求、断罪すべきである。国会が謝罪すべきは、実に靖国の英霊と我々日本国民に対してである。現在の国会にも、政府にも、わが国の近代史を裁く資格も権限もない。五百万人の「反対請願」を無視することは国民主権の侵害である。「国会決議」を争点として国民の信を問うのが憲政の常道である。

（6月10日記）

## 追伸

古井貞方

特攻会報編集者から求められて「アジア共生の祭典」の記事を投稿したのであるが、その後6月7日、衆議院は国家百年の計を誤る決議をなす。憤激もだし難く、ここに更に一文を草し投稿する次第である。

### 村山政権は国民にこそ詫びよ

村山野合政権は『国会決議』を強行採決することにより三つの大罪を犯した。直に総辞職して国民に詫びよ。

一、民主政治破壊の罪

国会決議は国民の総意を反映してこそ、その意義と権威がある。然るに、五百万人に及ぶ『反対請願』を握り潰し、政権維持の為、過半数にも及ばぬ比較多数で採決を強行した。国権の最高機関たる国会の名を辱かしめ民主政治を破壊した。

二、越権行為の罪

一国の歴史観（功罪）は永年の真摯な学問的研究により初めて定まるもの。国民の信託を得ていない野合政権による偏向的歴史観の内外宣言は越権行為も甚しい。

三、民族の名誉汚辱の罪（最大の罪）

戦争の原因目的結果の真摯な検証を怠り、勝者の論理に迎合し、先人の血と汗の歴史に汚名を被せ子孫に屈辱を遺した。その罪は最大なり。

# 高野山に建立された
# 昭和殉難者の碑

## ―現在の日本はこれらの人柱の上に存在する―

前橋予備士官学校出身の人達が建立委員会を組織し、佛教の聖地高野山奥の院境内に「昭和殉難者追悼碑」を建立し、昨年5月14日に開眼法要を行った。その後殉難者一、一七六柱の氏名を刻んだ副碑を建立し、本年4月29日には新に建った碑の除幕と開眼法要が行はれた。このことを本紙に紹介する所以のものは、これら殉難者が死を見つめる心情に、特攻隊員と一派通ずるものがあるような気がしたからにほかならない。

ところで、建碑の趣旨とするところは刻まれている碑文によって知ることができる。

（追悼碑文）

夫レ仁者ハ当ニ天下ノ憂イニ先立チテ憂エ天下ノ楽シミニ後レテ楽シム今之此ニ弔慰ヲ捧ゲントスル山下奉文大将閣下及ビ壱千六十八柱ノ英魂ハ身夙ニ軍籍ニアリ只管国策ノ伸張ニ専念シ遍ニ国運ノ開拓ニ戮力セリ然レバ第二次世界大戦ノ勃発スルヤ身ヲ塞北ニ挺シテ砲煙弾雨ヲ凌ギ肝ヲ南溟ニ砕イテ屍山血河ヲ越ユ具ニ難関ヲ嘗メテ従容莞爾唯国アルヲ知リテ我アルヲ知ラズ義アルヲ思ウテ身アルヲ忘ル蓋シ天ノ将ニ大任ヲ降サントスルヤ必ズ其ノ心志ヲ苦シメ其ノ筋骨ヲ労セシムレバナリ然ルニ何ゾ図ラン時運拙ナク国策ノ破綻ニ会シテ所期ノ目的ヲ果ス能ハズ功ハ敗戦ノ汚名ニ抹シ労ハ降伏ノ恥辱ニ包マレテ慰ムル能ハザリキ連合国礼ナク遂ニ名ヲ戦争犯罪裁判ニ借リテ冤罪ヲ刑場ニ誅セラル其ノ恨ム所真ニ万斛耳ヲ聴クニ耐エズ心之ヲ偲ブニ耐ヘザリキ爾来光陰早クモ転ジテ半世紀ヲ閲ス日愈　遠クシテ思愈滋ク思滋クシテ情更ニ濫ル怪々海潮ノ声ヲ聞イテハ魂魄ノ今ニ迷エルニアラザルカヲ疑イ燦々タル天辺ノ星ヲ仰イデハ英霊ノ今ニ瞬ケルニアラザルカヲ思ウ重ネテ其ノ功烈ノ平和安寧ノ風ニ蕩散シ日月忽忙ノ彼ニ亡失セラレンコトヲ恨ム如カシ幽魂ヲ天地ノ外ニ慰ムル手段ヲ取ラレンニハ依ツテ我等高野山奥ノ院ニ追悼ノ碑ヲ建立シ弘法大師ノ照鑑ヲ仰イデ其ノ雄志ヲ紫明ノ山水ニ留メントス今ヤ諸士ノ憶念シ止マザリシ東亜ノ康寧人類ノ福利具現スルノ日至レリ以テ瞑スルニ足ルベシ仰ギ願ワクバ十万ノ諸仏此等ノ幽魂ヲ誘引シテ速ヤカニ無上の覚位ニ導キタマワンコトヲ

昭和殉難者とは今次大戦終結後、敵国によって所謂戦犯と称し殺戮された人達をいう。

我が国が戦破れ降伏した後、戦勝国が裁判に名を借り国の指導者をA級戦犯と称し処刑したことが、如何に矛盾に満ちたものであったかは、最近多くの書物で論述されており、世の識者の承知している処である。そのことはさて措き、横浜及び戦域の各所に於てB級（指揮命令者）、C級（実行者）の裁判が行はれ、九二七名が死刑になったほか、獄中で虐待により殺された者や自殺した者を加えれば優に千名を越す。それは裁判とは名ばかりで、法がなければ法を作り、証拠が無ければ証拠を作り、全くの復讐劇であった。

戦争中捕虜や無抵抗の住民に対し暴行等の不当行為があった場合、先ずその事実を確かめ然る後犯人を探すのが常道であるが、彼等の遣り口は、、捕虜収容所の勤務者や民間人に接する職務にあった憲兵などを一網打尽にし、その後で被害者や証人を探し出すという方法である。被害者が出てこなければ公募し、告発を奨励し懸賞金まで出したという。告発と本人の陳述とが一致しなければ、脅迫や拷問によって検事の作成した陳述書に署名させ、白紙の陳述書に署名させた例も少くなかった。

ある人は詠う

口惜しくば戦にかてとうそぶきし
検事の言葉またも憶いぬ

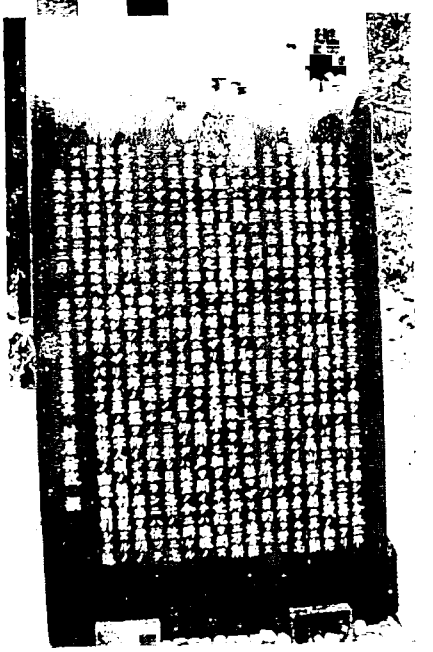
責められるべきは敗者だけではない苦である。彼等に正義があるならば、無辜の市民を殺戮した都市爆撃を何と心得ているのか。

難に殉じた人達の多くはお国の為と達観して死に臨んでいる。そのことは遺書や遺詠によく現れている。しかし戦闘中に死ぬのと違い、このような形で死を迎えることは悔しいという気持は当然であろう。特攻烈士は後に続くを信ずと言ひ残して出撃された。この殉難された人達は後に何を託しておられたのか、そして我々はどうしなければならないのか。

敵の為戦犯と呼ばれ刑場に斃れた人

は、軍事行動の延長である敵の為討死したのであるから戦死である。然るが故に昭和28年8月「戦争裁判受刑者等に対する特別措置」という法律によって、戦死と同じ扱となり靖國神社にも合祀された。従って我々は英霊と崇めてはいるが、それだけでよいのであろうか。我々はこのような特殊事情でお国の為非命に斃れた人のあるという史実を風化させてはならぬ。ある人は天皇陛下万歳と叫んで死刑台に登ったといい、またある人は海ゆかばを唱いつつ処刑の場所に曳かれて行ったという。これらのことを、彼等の為した非道と共に日本人の子々孫々に伝えなければならぬ。日本歴史に書き残さなければならぬ。慰霊祭とて読経し、祝詞を奉上するだけが慰霊ではない。後世に語り伝えることが最大の慰霊である。

高野山に建てられた碑は永久不変で後世に語りかけるであろう。しかし、この地は聖域であっても辺陬の地である。できることならもっと人目につき易い、帝都の真只中にでも建てたいものであるが、それができない我が国の現情を悲しまざるを得ない。



このように五基の碑の両面に県別五十音順に殉難者全員の氏名が刻まれている。見つめていると、この人達の無念さが伝わってくる。

# まだほかにもある
# 昭和殉難者の碑

東條首相等彼等のいうA級戦犯七名の死刑が執行されたのは23年12月月23日である。処刑された七士の遺体は、その夜のうちに横浜市宮の久保山火葬場に運ばれ荼毘に付され、遺族に引渡されることなく、木箱に収められいつこかへ持ち去られた。そして残りの骨は火葬場の骨捨場に投棄された。

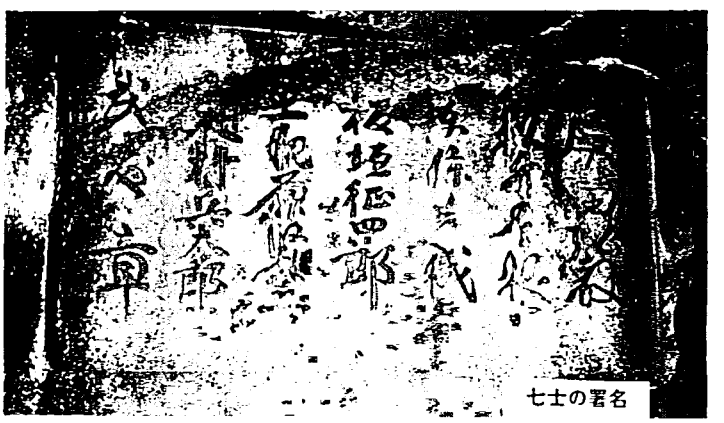
この投棄された残骨は、小磯国昭大将（終身刑）の弁護人だった三文字正平氏や、同火葬場長の飛田美善氏らの手でひそかに拾い集められ、しばらく同火葬場近くの興福寺に安置されていたが、その後熱海市伊豆山にある興亜観音堂（松井大将の建立したもの）に極秘裡に移され、さらに35年8月、三文字氏や橋本欣五郎大佐（終身刑）の弁護人だった林逸郎氏らの手によって、松井大将の郷里である愛知県幡豆郡幡豆町三ケ根山に建立された「殉国七士之墓」に埋葬され今日に至っている。

また伊豆山には興亜観音奉賛会の高木陸郎氏が建立した「七士之碑」があるが、ここにも遺灰が納められているという。この碑の背面には七士の絶筆が刻まれているが、これは処刑直前に花山氏の求めに応じ手錠をかけられた不自由な手で署名したものである。

この碑は昭和46年12月に赤軍派によって爆破されたが、翌47年4月興亜観音に詣でた東京のある会社社長の玉嶋信義氏がこれを見て修復を志し、同志と協力して同年8月末に修復完成した。

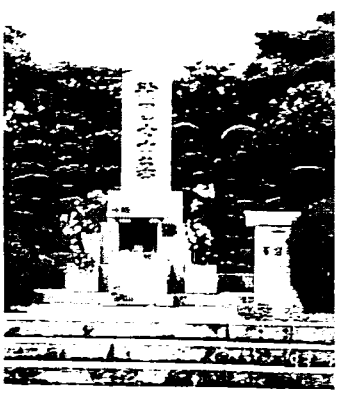
更にこの碑の横には「大東亜戦殉国刑死一〇六八霊位供養碑」がある。これは鎌倉在住の高橋智遍氏等が建てたもので、一〇六八柱の氏名を記した書き物が納められているという。

伊豆山にある碑



七士の署名

三ヶ根山にある碑



（碑　文）

米国の原子爆弾使用ソ連の不可侵条約破棄物資の不足などにより敗戦のやむなきに至った日本の行為を米中英ソ濠加仏新蘭印比十一ケ国は極東国際軍事裁判を開き事後法により審判し票決により昭和二十三年十二月二十三日未明　土肥原賢二　松井石根　東條英機　武藤章　板垣征四郎　広田弘毅　木村兵太郎七士の絞首刑を執行した。

横浜市久保山火葬場よりその遺骨を取得して熱海市伊豆山に安置していた三文字正平弁護士は幡豆町の好意によりこれを三ケ根山頂に埋葬し遺族の同意と　清瀬一郎　菅原裕両弁護士等多数有志の賛同を得て墓石を建立した。

遙かに遠く眼を海の彼方にやりながら太平洋戦争の真因を探究して恒久平和の確立に努めたいものである。

# 殉難者の遺詠

主として山口志郎著
「将兵万葉集」より

〝鳥の将に死なんとするや、その鳴くこと哀し。人の将に死なんとするやその言うこと善し〟（論語泰伯篇）。どれもこれも真情溢れ、読んでいて心に迫るものがあり、この人柱の上に現在の日本があるのだという感を深くする。ここに紙面の許すだけ掲げてみる。

〈死生観〉

堀本　武男　陸軍大尉　昭和22年4月1日広東にて法務死　35歳

諦観の心静かに時を待ち獄舎の中に歌つくる我は　（世紀の遺書）

板垣征四郎　陸軍大将　23年12月23日巣鴨にて法務死　64歳

さすらいの身の浮雲も散りはてて真如の月を仰ぐうれしさ　（世紀の遺書）

松井　石根　陸軍大将　23年12月23日巣鴨にて法務死　70歳

天地も人も恨まず一筋に無畏を念じて安らけく逝く　（平和の発見）

徳本　光信　陸軍大佐　22年4月30日広東で法務死　56歳

武夫は誠の心只一つ抱きしめつつ世を終りたり　（祖国への遺書）

大柴　林　憲兵大尉　23年10月4日マカッサルにて法務死　30歳

これやこれ刑場に行くこの道は男一世の花の道かな　（世紀の遺書）

菅原　功　陸軍大尉　22年12月6日モロタイにて法務死　27歳

曇りなき月を眺めて思うかなわが心境はこの月のごと　（世紀の遺書）

堀内　豊秋　海軍大佐　23年9月25日メナドにて法務死　47歳

月に雲花に嵐と悟り得て身は秋晴の空を待つのみ　（世紀の遺書）

〈祖国を思う〉

前田　三郎　海軍中尉　22年9月16日広東にて法務死　28歳

今更に散る身惜しとは思はねど心にかかる国の行末　（世紀の遺書）

浅木留次郎　憲兵中尉　23年9月23日　グロドック にて法務死　45歳

ふがいなく逝く身なれども心には祖国の行末憂ひやまざる　（世紀の遺書）

松谷　義盛　憲兵軍曹　23年9月1日上海にて法務死

ながらえて花を待つべき身なれどもいかで惜まむ大君の為　（世紀の遺書）

谷　寿夫　陸軍中将　22年4月南京にて法務死　65歳

身はたとへ異域の土となるとても魂は返らん君が御側へ　（世紀の遺書）

妻苅　悟　憲兵大尉　23年4月20日上海にて法務死　34歳

報国の念醒めやらず雄々しくも吾広東に花と散らなむ　（世紀の遺書）

近藤　新八　陸軍中将　22年10年10月広東にて法務死　54歳

大君はいかに在すらんこの夕賤が臣さえ胸の痛むを　（祖国への遺書）

井手　尾薫　憲兵軍曹　23年10月4日マカッサルにて法務死　28歳

吾が如く世を去るものの魂を生かせ久遠の祖国の栄に　（世紀の遺書）

鈴木　昇　陸軍曹長　23年4月6日グロドックにて法務死

今更に何か惜まん吾が命国の御楯になると思えば　（世紀の遺書）

谷口　清　憲兵少佐　22年12月30日グロドックにて法務死　46歳

幽明の境に立ちて国想う我が誠心は神ぞ知るらむ

平山　辰己　憲兵曹長　22年3月3日メナドにて法務死　28歳

数ならずさゞれ小石の誠をば積み重ねてぞ国は泰けれ（世紀の遺書）

吉田　豊　陸軍軍曹　22年1月10日アンボンにて法務死　31歳

君見ずや露紅に染む我が血潮その紅ぞ御国護らむ（世紀の遺書）

〈父母妻子を思う〉

富田　徳　憲兵曹長　22年8月14日上海にて法務死　29歳

思うまじ思うまじとて思ひけり吾無き後の賤が家のこと　（世紀の遺書）

前崎　正雄　陸軍大佐　22年9月27日上海にて獄中死　57歳

渡り鳥伝へてしがなこの文を郷里守る我が妻や子に

斉藤　甚吉　憲兵軍曹　23年9月22日グロドックにて法務死　35歳

海山の恩に報いず逝く吾の毎夜の夢は

老いし母の身

納富　季雄　海軍長曹長　22年5月16日　マカッサルにて法務死　37歳

汝が父は吉野の桜富士の雪心乱すな神しろしめす　（世紀の遺書）

中山　伊作　憲兵少尉　22年11月1日ランゲーンにて法務死　38歳

わが妻の哭きに泣き伏す姿見え我が筆も哭き枯れて進まず　（世紀の遺書）

曽根　憲一　陸軍大尉　21年12月7日クロトックにて法務死　35歳

妻の瞳やいとしの子等のほほえみし可愛き顔の懐かしく見ゆ　（世紀の遺書）

服部　素善　海軍技術大尉　23年10月7日バリックパパンにて法務死

武蔵ぬの天の田鶴むらはぐくみし母には告げよあだにな嘆きそ（世紀の遺書）

三樹　寛　憲兵曹長　22年12月31日ケロトックにて法務死

いとけなき子等は朝毎陰膳を供えてあらむ吾がうつしゑに（世紀の遺書）

長　幸之助　憲兵少佐　22年12月30日クロトックにて法務死　31歳

母上へ

たらちねの母の心にくらぶれば月の光はつめたかりけり（世紀の遺書）

〈痛　憤〉

鈴木　明　憲兵軍曹　22年5月6日広東にて法務死

力こそ正義なりとふことわりをここにして知る死刑囚我は　（世紀の遺書）

中田　新一　憲兵少尉　22年4月25日サンタクルスにて法務死　36歳

殺すなら早く殺せとつめよりて青き目玉をにらみかへしぬ　（世紀の遺書）

久留田　巌　陸軍中尉　23年4月6日香港にて法務死　13歳

すじ道の立たぬ裁きに散り逝きし大和桜のもゆる恨は　（世紀の遺書）

篠原多磨夫　海軍大佐　26年6月11日　マヌス島にて法務死18歳

あしざまにののしられつつ外つ国に首絞められて我果つべしや（世紀の遺書）

加藤　実　陸軍少尉　22年3月31日マニラにて法務死　27歳

うつし世の覇者権勢のいたづらと笑つて死なん大丈夫の友　（世紀の遺書）

藤　忠三郎　陸軍大尉　23年8月13日マニラにて法務死　10歳

歳ゆかぬガードに強く叱られて小さくなりぬ中老の吾　（世紀の遺書）

シンガポールのチャンギー刑務所の壁に書き残されていた歌二首

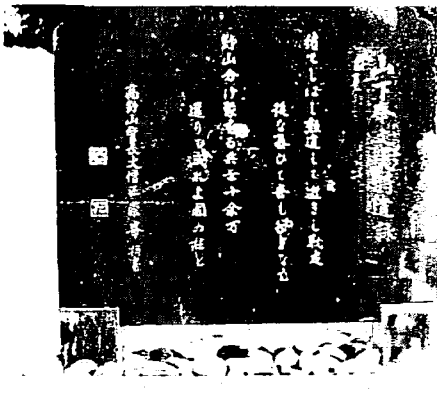
えびすらの泥靴にうたれわが顔の感覚失せし灼熱の獄

たらたらと頬つたいゆく生ぬるき血潮を嚙めば涙したたる

歌集には地域別に分類しまだ沢山載っているが、ここにはこのように分類して一部を転載してみた。

法務死という言葉は戦勝国の行った戦犯裁判で刑死したことをいうのであるが、法にも価しない所業で殺害されたのであるから、適切な日本語とは言い難い。

敗戦の結果戦勝国によって日本民族が被った不当な被害は、この戦犯問題とシベリヤ抑留をもって双璧となす。もう一つ、奪取された北方領土があるが、これは取返す可能性が無い訳ではないので暫く措くとし、前の二者は取り返しがつかない。その中でも戦犯問題は東京裁判史観という重い後遺症を残している。それを回復しなければならない要路の顕官は、自分自身が罹患していてはどうにもならない。




我々は声を大にしてこのことを叫び続けなければならぬ。日本人の精神改革こそが、昭和殉難者に対する最大の慰霊であらう。

高野山の碑に添つて建てられている。

待てしばし勲遺して逝きし戦友
後な慕ひて吾も行きなむ
野山分け聚むる兵士十余万
還りて成れよ国の柱と

そのほかの山下大将遺詠

今日も亦大地踏みしめ帰り行く我がつわものの姿たのもし

満ちかけて晴れと曇りにかわれども永久に冴え澄む大空の月

# 昭和殉難者遺言集を見て
# 吉田松陰言行録を再読す

田中　賢一

4月29日に行はれた刻名碑開眼法要の際「慰霊鎮魂と顕彰のための証言」と題して遺言集が参会者に配られた。それを読んでいて、私はすぐに刑死した吉田松陰を連想し、かつて熟読した吉田松陰に関する書物を探し出して繙いた。

萩に蟄居中の松陰は、幕命によって江戸送りとなり、安政6年6月24日江戸に着き、取調を受け伝馬町の獄に繋がれた。その後二回ばかり取調を受け、10月16日の尋問で死罪免れ難いことを知り、20日には郷里の父兄宛次のような永訣書を認めた。

平生の学問浅薄にして、至誠天地を感覚すること出来申さず、非常の変に立到申候。嘸々御愁傷も遊ばさるべく拝察仕候。

親思う心にまさる親こころ
今日の音づれ何ときくらん

去り乍ら、去年十一月六日差上置候書を得と御覧遊ばされ候はば、左まで御愁傷にも及び申さずと存じ居候。尚又当五月出立の節心事一々申上置候事に付、今更何も思残候事御座無候。此度漢文にて相認候諸友に語る書も（註留魂録のこと）御転覧遊ばさるべく候。幕府正議は丸に御取用これなく、夷狄は縦横自在に御府内を跋扈致候へども、神国未だ地に墜ち申さず、上に　聖天子あり、下に忠魂義魄充々致候へば、天下の事も余り御力落しこれなく候様願奉候。随分御気分御大切に遊ばされ、御長寿を御保ち成さるべく候。

十月十日認置　寅二郎百拝
家大人膝下
玉大人膝下
家大兄座下
両北堂（実母、養母）様随分御気体御厭ひ専一に存奉候。私誅せられ候とも、首までも葬呉れ候人あれば未だ天下の人には棄てられ申さずと御一咲願奉候。児玉、小田、久坂の三妹へ、五月に申置候事忘れぬ様御申聞かせ頓奉候。呉々も人を哀まんよりは自ら勤むる事干要に御座候。私首は江戸に葬り、家祭には私平生用ひ候硯と、去年十一月六日呈上仕候書とを神主と成され候様頓奉候、硯は己酉七月か赤馬関廻浦の節買得せしなり。十年余著述を助けたる功臣なり。

松陰二十一回猛士とのみ御記し頓奉候。

この松陰の遺書は、その神髄が昭和殉難者のそれと吻合すること驚くばかりである。

更に松陰は10月26日夕刻、いよいよ処刑の日近いのを察し、獄中に端坐し門人同志に対し最後の遺書を書いた。これが留魂録であって、その冒頭には

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも
留め置かまし、大和魂

と認め、その末尾には

討たれたる吾をあわれと見ん人は
君を崇めて　夷払えよ
七度も生れかえりつつ夷をぞ
攘はんこころ　吾れ忘れめや

と結んでいる。

昭和殉難烈士も多くの遺詠を残されたが、これ亦松陰に通ずるものがある。

処刑はその翌日、10月27日に行はれた。早朝に呼出しを受けるや松陰は「はい」と一声答え、手もとにあった紙をとり、

これ程に思い定めし出で立ちは
今日きくこえぞ嬉しかりける

と認めた。これが三十歳の生涯の絶筆となった。

評定所で死罪の宣告を受けるや、留魂録冒頭の「身はたとい……」の歌を朗々と口ずさみ、縄打たれて立去るにあたり次の詩を吟じた。

五今為国死　吾今国の為に死す
死不負君親　死して君親にそむかず
悠悠天地事　悠々たり天地の事
鑑照在神明　鑑照神明に在り

役人共も粛然として耳を傾け、獄卒も制止するのを忘れ、吟じ終るや慌てて駕籠に押し込め、一旦伝馬町の獄に引返した。獄を出て処刑場に向う際もその詩を吟じ、同獄の士に目礼しつつ従容として曳かれて行った。

刑場にて首打たれる前に懐紙を求めて鼻をかんだという。

昭和殉難の士も最後に天皇陛下万歳を称えたとか、海征かばを高唱しつつ曳かれて行ったとかの話は枚挙に暇がない。正に昭和の吉田松陰というべきである。

# 義烈空挺隊慰霊祭

航空碑奉賛会理事
菅原　道熙

例年突入日5月24日に近い日曜日に行われる摩文仁での義烈空挺隊慰霊祭は、今年は自衛隊行事の都合で6月4日11時から顕彰碑前で執り行われた。テレビの気象情報は、本州各地の大雨警報を伝えていたが、沖縄は、朝方雲に覆われていた空は次第に薄れ、開式時には薄日が差す様になり、周辺の樹々の緑が一段と映えて、祭典に色を添えた。

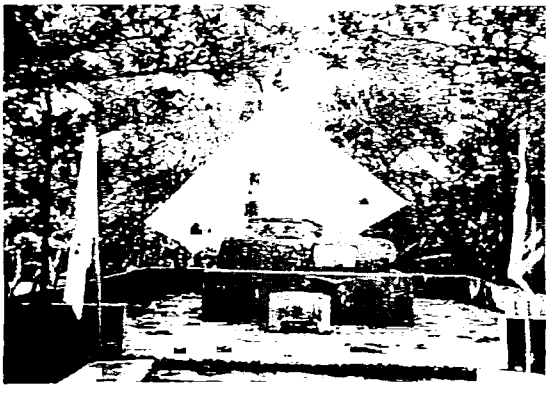
慰霊祭は先づ全日本空挺同志会沖縄支部長の陸上自衛隊第一混成群群長山縣正明一等陸佐が祭文を奏上、次いで毎年参加されている田中賢一名誉会長が追悼の辞を述べ、その後で最近完成した義烈空挺隊のカセットテープが流され、参列者一同粛然として拝聴した。献花に移り、自衛隊の四名のラッパ手が国の鎮めを奏でる中を、第一混成団団長瀬山博英陸将補以下全員が、白い菊花を碑前に捧げ、慰霊祭は滞りなく終了した。自衛隊の慰霊祭実行メンバー、全日本空挺同志会に関しては、本誌20号に詳述されている。

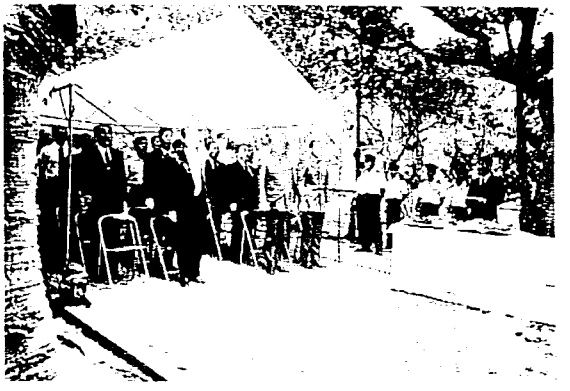
山縣一佐の父上（山縣克巳少佐）は、徳之島飛行場の責任者であられ、父上の言によると、徳之島飛行場は特攻機の中継基地として、給油、爆装の任に当り、薄暮から夜にかけて飛来した特攻機は、早暁沖縄に向けて飛立って行った。しかし、技倆未熟による着離陸時の事故による損耗も少くなかったという。又昼間米軍の爆撃を受けた滑走路の補修には、夜間島の青少年が勤労奉仕で当ったとのことである。父上が各特攻隊と別れの盃を交された記念写真が澤山御自宅に残っているそうである。山縣少佐の第七十五飛行場中隊は、昭和19年4月28日の盛岡で編成、5月19日出発、奄美大島古仁屋港経由、6月11日徳之島に展開した（陸軍航空の鎮魂総集編）。

沖縄翼友会（旧陸海軍航空関係者）からは四人が参加され、会長の古波津里英氏は特操一期、第二四四戦隊所属、三式戦から五式戦に機種改変がなされ、昭和20年5月10日六航軍指揮下に入り、知覧上空の邀撃戦に従事された。二四四戦隊は、7月1日に第三十戦闘飛行集団の隷下に入り、八日市飛行場に移駐した（鈴木正一著　蒼穹萬里）。慰霊祭終了後、碑前の天幕内で出席者一同会食したが、席上田中元会長は、義烈碑建立、後れて出来た平和祈念公園慰霊協会へ永代供養料を納める様になった経緯等に関する裏話を披露された。

今年の出席者は、自衛隊が約二十名自衛隊以外七名であった（出席した自衛隊員は、習志野にある陸上自衛隊の空挺部隊にかつて所属し、現在は沖縄の第一混成団に勤務している人達で、全員胸に空挺徽章をつけている）。

戦後五十年を経過し、各地区での各種の慰霊祭の施行に終止符が打たれ始めている情勢下、義烈空挺隊の慰霊祭は、自衛隊の存する限り永久に続けられると、瀬山陸将補が明言された。誠に喜ばしいことである。



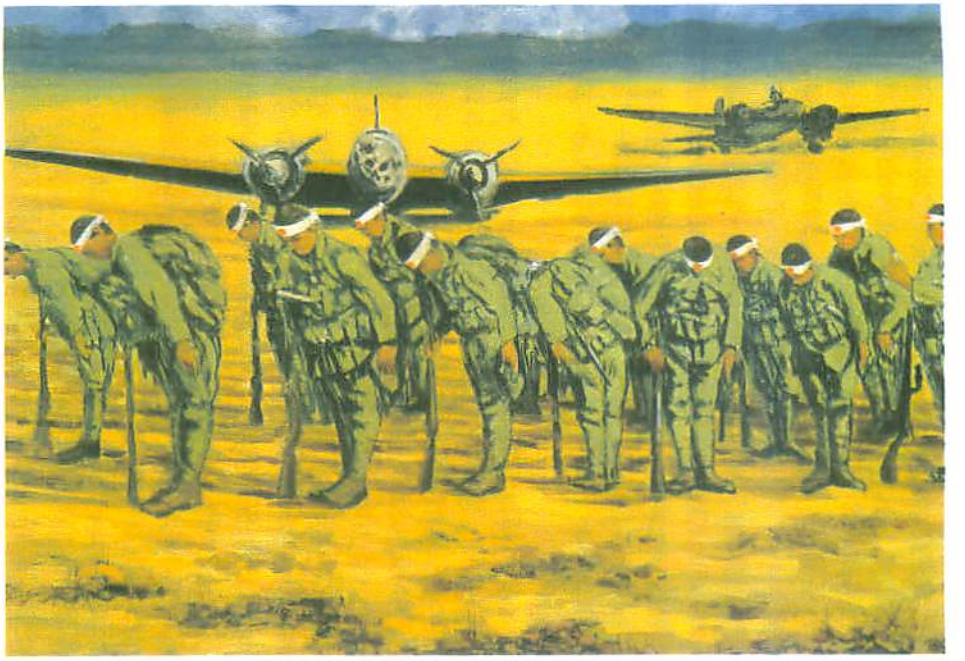


出撃前の笑顔

宮越晴雄准尉
健軍出撃前の乾杯

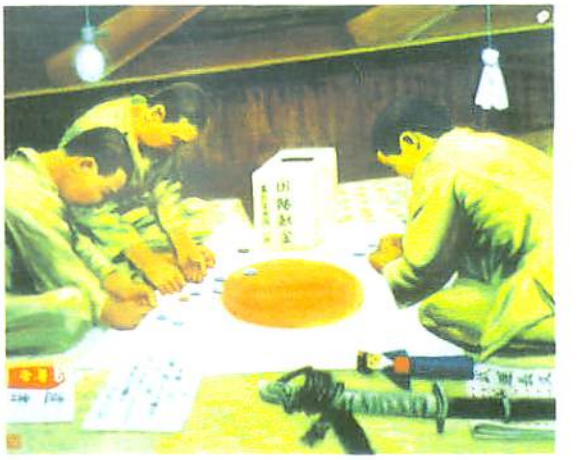
# 義烈空挺隊健軍を発進

松本 武仁画



搭乗前全員郷里に向って別れを告げる

遺書を書く隊員



有金を国防献金に出す

（出撃前夜）

見送りの人に手を挙げて応える奥山隊長と諏訪部飛行隊長

沖縄周辺にいる敵艦船に対する航空特攻を成功させる為、読谷と嘉手納の両飛行場を制圧する任務で、義烈空挺隊は20年5月24日夕刻熊本の健軍飛行場を発進した。

米軍の記録によれば読谷に着陸できたのは只の一機に過ぎなかったようだが、三日間飛行場の機能を喪失させた。

この絵はすべて当時の写真を基礎にして画かれたものである。